

写真美術館図書室の試み——図書館の未来を探る

来代紀子（東京都写真美術館 図書館司書）

The Activities of Tokyo Metropolitan Museum of Photography Library
: Searching for the Future of Library

KITADAI Noriko
Librarian, Tokyo Metropolitan Museum of Photography

—はじめに—



写真1. 図書室 閲覧室

—開室 15 年目にして、出納冊数が最高冊数を記録

写真美術館図書室は、1995年1月の写真美術館開館以来、写真・映像に関する専門図書館として運営を続けて来たが、開室15年目の2009年度にして、資料の出納冊数が開室以来、最高冊数を記録した。国内外の多くの美術館・博物館に併設された研究機関としての側面を持つ専門図書室がそうであるように、当館の図書室も館外貸出は行っておらず、資料の利用方法は図書室内での閲覧という形式をとっている。さらに当館の場合、写真家の作成した写真集も作家の一つの作品である、また貴重な雑誌のバックナンバーも展覧会で使用することもある当館の大切なコレクションの一部であるという考えのもと、ほとんどの資料は温湿度の管理された書庫に大切に保管されている。「出納冊数」とは、書庫の中に保管された資料が利用された回数のことであり、一般的な図書館における「貸出冊数」に該当するものである。

図1のグラフからわかる通り、ここ何年かの図書室の年間入室者数は3万人前後で大きな変動はなく、開館当初の37,844人（平成7年度）という数字には及んでいない。

蔵書冊数は、開室時の約4万冊から現在では6万冊を超え（逐次刊行物も含む）、約1.5倍に増加している。一方で、年間出納冊数は、平成7年度の5,967冊から、開室15年目の平成21年度には23,133冊、約3.9倍となり、蔵書冊数の増加のペースを大きく凌ぐ勢いで増加した。開室15年目にして出納冊数が最高冊数を記録したのはなぜだろうか。ここ何年かの図書室の試みを振り返りつつ、検証してみたい。

また、後半では、「小さな専門図書館から探る図書館の未来の姿」と題し、図書館の未来の姿について考えてみたい。

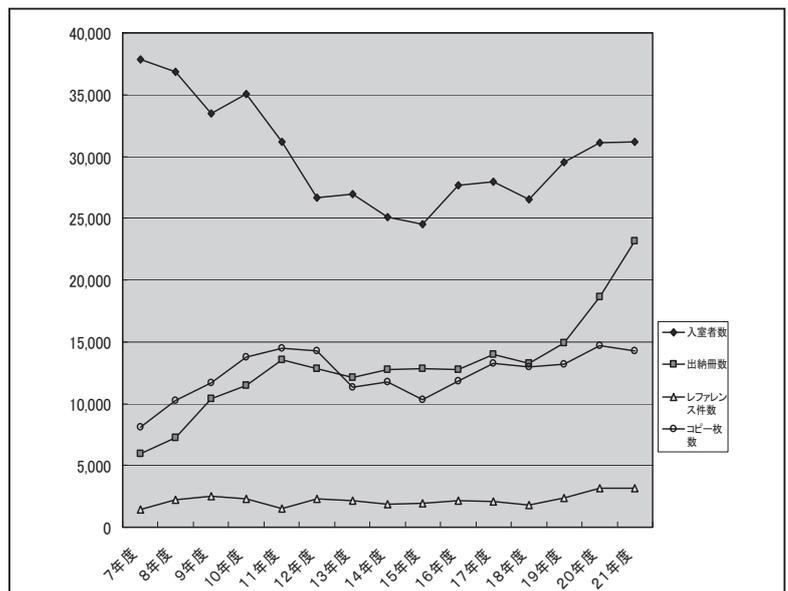


図1 写真美術館図書室利用統計（経年）平成7年度～平成21年度

1. 写真美術館図書室の取り組み

1.1 新システムの導入

当館では、従来は、美術館の収蔵作品と図書室の資料を一元管理するフルカスタマイズの独自システムを使用していたが、システムのリース期間が終了することを機に平成18年度より業務プロセスも含めた見直しを行い、図書室は、国立情報学研究所（NII）のオンライン共同目録システム（NACSIS-CAT）に対応した図書館パッケージシステムを導入することにした。平成19年度からより具体的な検討、準備を進め、平成20年4月より新システムが稼動している。

利用統計を見てみると、システム移行前、平成19年度の合計出納冊数は14,938冊だったが、移行後の平成20年度は、18,704冊（前年度比125%）、平成21年度には、23,133冊（前年度比124%）と、この2年間で55%の増加となり、新システムの導入が出納冊数の増加に大きく影響したと考えられる。



写真2. 新図書館システムの来館者用端末

一 NACSIS-CAT に対応した図書館パッケージシステムの導入に至った経緯

開館時より使用してきた収蔵庫の作品資料と図書室の資料を一元管理するシステムは、オーダーメイドのシステム（日本IBM株式会社）であった。図書館の世界では、図書館用のパッケージシステムが目覚ましいスピードで高機能化していたが、それに追いつこうとすると、オーダーメイドでは、開発コスト、検討に要する労力、共に負担が大きく、なかなか難しい状況が続いていた。

一般的に美術館の収蔵作品を管理するためのシステムと比較し、図書館システムが急速に発達してきたのには、収蔵作品と図書、雑誌資料の持つ性質の違いによるところが大きいのではないかと思う。美術館、博物館の収蔵庫で管理される作品資料は、オリジナリティ、希少性が極めて高いものである。一方で、図書館で管理される、図書や雑誌は、たとえ限定本であっても複数部発行されるもの、同じものがこの世に複数存在するという性質を持ったものである。その結果、図書館は、目録規則など目録を作成するためのノウハウが豊富である。「図書館は、情報のパッケージである図書や雑誌というアイテムに対し、比較・対照のための評価項目（書名・著者名・出版者〔社〕などの書誌情報）を提供してきたのであり、この作業に長けた伝統を有する機関なのである」（井上 2004, p.90）。図書館では、従来、目録規則にしたがって各館毎に目録を作成していたが、この負担を軽減しようと、やがて、共同で目録を作成する、他館が既に作成した同じ本の書誌データをコピーして使用するというコピーカタログリングが発達した。そして、現在では、インターネット上でネットワークに参加し、即時にデータをダウンロード、アップロードして目録作成を行うことができるのである。国立情報学研究所（NII）のオンライン共同目録システム、

NACSIS-CAT（以下、ナクシス、<http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/about/cat/>（参照2011.1.11））に参加すると、書誌データを登録する際、国内のデータベースにもしその本のデータがなければ、海外の図書館のデータも参照し、それを利用して目録作成ができるようになっている。これは、多言語の資料を扱う図書館で特に威力を発揮する。ハンゲルやロシア語の資料であっても、資料に記載されたISBNで検索し、ヒットすれば、ワンクリックでハンゲルやロシア語の書誌情報を自館システムにダウンロードすることができるのである。以前の当館のシステムには、洋書が蔵書の3割を占めるにもかかわらず、このコピーカタログを行うための機能が備わっていなかった。

開館当初より、データの作成や装備は外部委託で行うこととし、委託先のシステムからOCLC（海外の代表的書誌ユーティリティ http://www.kinokuniya.co.jp/03f/oclc/oclc_top.htm（参照2011.1.11））等の有料データベースを利用してデータを作成し、そのデータを当館のシステムに取り込むという方法をとってきたようである。ところが近年、OCLCの料金体系が変更となり、料金が高騰し、将来的に継続して利用していけるかどうか危ぶまれていた。一方で、参加館が大学図書館中心だったナクシスは、次第に小規模の専門機関にも門戸を開くようになり、OCLCもNACSIS-CATに参加すると、ナクシスを通して無料で書誌データを利用できるようになった。ナクシスに参加するには、ナクシス対応のシステムを導入する必要があるが、以前はとても手が届かないと思われた大学図書館で使用されている高機能の図書館パッケージシステムもいつしか当館でも手の届く価格になっていた。

開館当初、しばらくは、大量に登録する必要があった資料も購入予算が厳しくなったこともあり、次第に受入冊数が減少していた。以上のように様々な条件、要素が重なって、ナクシスに対応した図書館パッケージシステムを導入し、委託先のシステムからではなく自館のシステムから直接ナクシスに参加してデータ作成を行うという新たな方向性が見出された。

調査の結果、旧システムに登録したデータを損ねることなく新システムでも活かすことができることも判明し、図書室は、システムを作品と一元管理するフルカスタマイズのシステムから、ナクシス準拠の図書館パッケージシステム（株式会社リコーのlimedio（リメディオ））に移行し、業務のプロセスも外部委託から自館整理へと変更することになった。

一システム移行後

利用統計（図1）によると、システム移行前、平成19年度は14,938冊だった年間合計出納冊数は、移行後の平成20年度は、18,704冊（前年度比125%）、平成21年度には、23,133冊（前年度比124%）と、新しい図書館システムになったこの2年間で55%の増加となった。

また、図書室の利用者に行ったアンケート調査の結果によると、「蔵

書の検索方法について」という質問に対して回答のあったもののうち、移行前（2007/11/17～2008/2/24）は、[A.判りやすかった 39% B.ほぼ判りやすかった 25% C.普通 26% D.判りにくい 9% E.とても判りにくい 1%]（図2）という結果だったのに対し、移行直後（2008/4/19～2008/8/9）には、[A.判りやすかった 47% B.ほぼ判りやすかった 25% C.普通 24% D.判りにくい 4% E.とても判りにくい 0%]（図3）と、「A.判りやすかった」が、8%、増加する結果となった。

また、移行直後（2008/4/19～2008/8/9）のアンケートの中の「図書館システムが新しくなったことについて」という質問に対しては、回答のあったもののうち、[A.大変良い 28% B.良い 37% C.普通 33% D.良くない 2% E.とても良くない 0%]（図4）と、98%の人がA.からC.を選ぶ結果となり、新しいシステムが、図書室の利用者に広く受け入れられたことがうかがえる結果となった。

図書室の利用者の多くは、研究者や学生であり、多くの大学図書館で採用されているナクシス準拠の図書館システムを導入したことにより、利用者にとって既になじみのある親しみやすい検索画面、検索方法であった可能性が高く、それが使いやすさにつながっているのではないかと思う。また、ナクシス準拠のシステムになったことで、自動的に、書誌と所蔵のデータ形式となり、データ項目が増加し、各種のMARC（機械可読目録）もすべて取り込めるようになった。多言語対応、典拠ファイル（著者名、統一書名典拠）なども加わったことで、データの品質が向上し、その結果、より検索しやすく、より検索結果が見やすくなっている。その結果、OPACを検索し、閲覧したい資料にたどり着き、閲覧請求票を印刷し、カウンターで申し込むまでの時間が、以前よりも短縮され、より気軽に繰り返し出納申請を行えるようになり、出納冊数が増加したものと考えられる。

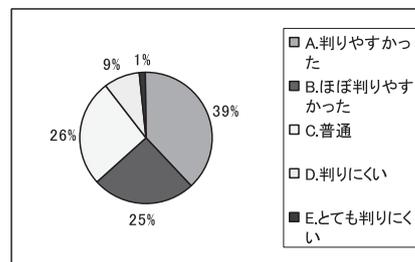


図2 システム移行前 蔵書検索の方法について

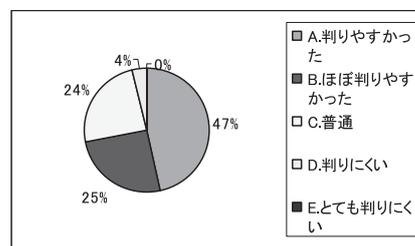


図3 システム移行後 蔵書検索の方法について

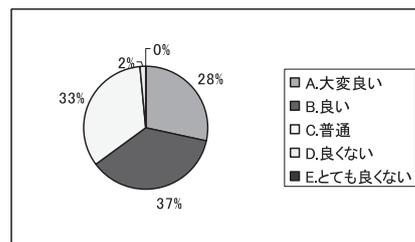


図4 移行後 図書館システムが新しくなったことについて

1.2 OPACをインターネット公開する・横断検索へ参加する

システムの移行を行う3年前の平成17年4月より、写真美術館図書室は、所蔵資料情報のインターネット公開（<http://tokyophotomuseum-library.opac.jp/>）を始めている（図書資料のみ）。それまでは、来館しなければ調査できなかった所蔵情報がインターネットでどこからでも検索できるようになったことは、大変大きな変化であった。図書室のHPを通じて、図書室の利用方法や情報も発信することができるようになったため、図書室の存在が広く認知されることにつながり、図書室の存在感を高めることができた。トップページへの訪問件数は、年間39,611件（平成21年度）と実際に図書室を訪れる利用者の数を上回っている。

公開して直後は、出納冊数に大きな変化はみられなかったが、3年後のシステム移行後の出納冊数の急増は、この3年間の下地があってこそのものであり、インターネットによるOPAC公開との相乗効果であると思われる。このOPACの公開については、同じ東京都歴史文化

財団内で、東京都現代美術館の美術図書室が既にASPサービス（株式会社ブレインテックのJopac）を利用して公開していたこと、また、当時、江戸東京博物館が同じ方法で公開準備を進めていたことで、横のつながりが大きな力、後押しとなり、公開を実現することができた。さらにOPACを公開したことで、平成19年1月からは、美術図書館横断（ALC: Art Libraries' Consortium, <http://alc.opac.jp/>（参照2011.1.10））へも参加することができた。この横断検索は、現在、東京国立近代美術館、国立新美術館、東京都現代美術館、横浜美術館、国立西洋美術館、東京国立博物館、江戸東京博物館、当館が参加し、8つの美術館・博物館に併設された図書室の資料を一度に検索することができる横断検索システムである。ネットワークを介して、さらに多くの美術図書館同士のつながり、他館との連携の仕組みも築くことができたのである。ALCはこの活動により平成19年に第1回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会推進賞を受賞している。

1.3 蔵書の魅力を伝える

一 展覧会関連図書コーナーを企画する

写真美術館図書室の存在をより多くの人に知ってもらおうと、OPACインターネット公開のさらに1年前、平成16年度より継続して図書室で行ってきたのが展覧会関連図書コーナーの企画である。写真美術館図書室の資料のほとんどは閉架式書庫の中に保管されており、魅力的な資料がたくさんあるにもかかわらず、開架式の図書館と比べて、眼に触れる機会が少ない。スペースの都合もあり、開架に置くことができる資料は限られる。いつも同じ本が並び、偶然、書架で面白い本に出合えるという楽しみが少なくなってしまうという弱点を補い、書庫の中に魅力的な資料がたくさんあることを利用者に知ってもらえるのが展覧会関連図書コーナーである。過去にも行ったこともあったようだったが、16年度からは閲覧室に並べる展覧会関連の資料のリストを作成し、その展覧会の会場受付に配布し、館内の職員にも周知し、展覧会場から図書室へ人の流れができるように意識して行った。その結果、展覧会期間中、コーナーの資料を目掛けて図書室を訪れる利用者が明らかに増加した。16年度に3回企画したところ、好評であったため、継続して行うようになり、現在では年間10回ほど行うまでになっている。6年を経て、図書室といえば、関連図書コーナー、という風に来館者の間ではすっかり定着しているようである。

美術館に併設されたライブラリは、一般の方にも公開しているが、「①所蔵品に関わる資料と、②展覧会に関わる資料を持ち、③所蔵品や展覧会の企画、調査を業務とする学芸員の研究支援のためにある」（水谷 2004, p.440）ものでもある。展覧会関連図書コーナーを運営していると、学芸員スタッフとのつながり、連携の力を感じる。当館の学芸員は、図書室のコレクションに対して最も厳しい目を持つヘビーユーザーであり、最も強力な支援者である。展覧会関連図書コーナー



写真3. ウィリアム・クライン展 関連図書コーナー
(平成16年度)

の運営を行うと、学芸員の展覧会の企画が発表された時点から、コーナーを意識し、収集が始まるようになる。司書の眼、また、展覧会を担当する学芸員の眼により蔵書にチェックが入り、購入や寄贈によりコレクションが補われ、展覧会がスタートする頃には、学芸員が展覧会準備のために使用した充実したコレクションが、展覧会関連図書コーナーに並び、来館者の方楽しんでいただくことになる。学芸員がフロアレクチャーで図書室の関連図書コーナーに言及すると、レクチャー終了後に図書室が混み合うという現象も起きている。

一展覧会に参加する「キュレーターズ・チョイス」展

平成18年度の「キュレーターズ・チョイス」展では、学芸員や保存科学専門員と共に司書も写真美術館の専門スタッフとして参加した。図書室の資料からライブラリアンズ・チョイスとして12冊を選び、図書室の閲覧室にサテライト展示として、資料を手にとって楽しめる方法で展示した（写真4）。この時に考案した資料を展示する木製の3つの白い台は、引き続き、次の年に行われた「キュレーターズ・チョイス07」展でも使用され、現在では、展覧会関連図書コーナーの展示で年中無休で大活躍している（写真5）。「キュレーターズ・チョイス07」では、図書室内に10冊、展示した他に、地下1階の展示室内にも6冊をケース展示し、フロアレクチャーにも参加した（写真6）。展覧会に参加することで、展覧会のチラシにもライブラリアンズ・チョイスと司書のコメントが掲載され、展覧会関連図書コーナー以上に、図書室の存在とその蔵書の魅力を広く世の中に広めることができた。

1.4 コレクションの持つ力

OPACを公開してから、書庫の特定の資料を閲覧しようと図書室を訪れる利用者が増えている。

利用者は日本国内に留まらず、遠く海外からもやって来る。遠方からも人々を惹きつける資料が写真美術館図書室にはあるのである。限定数しか発行されない写真集は、出版物でありながら、限りなく一次資料に近いものである。特に日本では、戦後、写真家たちが写真集をプリントとは違った別の表現の媒体として制作に力を注いできた歴史がある。写真集、一冊で大きな主題を表現するという試みが様々な写真家によって行われてきた結果、世界の中でも特に独自性と芸術性の高い写真集が生まれ、写真集という一つの文化を作り出したと言われている。2009年に出版されたアイヴァン・ヴァルタニアン氏と当館の専門調査員である金子隆一氏の共著、『日本写真集史：1956-1986』はその魅力を余すところなく伝える1冊である。アメリカ版、フランス版、日本版が出版されていることから、日本の写真集が海外から高い評価を得ていることがうかがえる。この本の中で紹介されているような、今ではもうオリジナルの入手が困難な貴重な写真集を、図書室では来館していただければ、どなたでも閲覧していただくことができるので



写真4. キュレーターズ・チョイス展（平成18年度）
図書室サテライト展示



写真5. 旅展第3部 関連図書コーナー（平成21年度）



写真6. キュレーターズ・チョイス07展（平成19年度）
B1展示室フロアレクチャー風景

ある。図書室では、もちろん、写真集以外の資料も幅広く収集している。もし、ある写真家について調査したい時には、国内外の写真集だけではなく、その写真家の記事が掲載された雑誌、国内外で開催された展覧会のカタログ、評論の本、写真史の本と、様々な資料を一堂に会することが可能である。たくさんの図書館を渡り歩かずとも、一箇所ですべて効率的に調査をすることができるのである。

写真に関する図書などの資料を一次資料として書庫で大切に保管すると同時に広く閲覧に供するというこの写真美術館の発想は、どこから生まれたものなのだろうか。

1979年5月に日本写真美術館設立委員会は文化庁に「日本写真美術館」の設立を要望する要望書を提出している。その要望書の「「写真美術館」の構想」の中に、写真に関する諸資料、文献の収集、整理保存を行うこと、また、それらの閲覧を行うこと、が明記されている。その構想は、それ以前、1973年に「日本写真文化センター」の設立が提案されていた時点で既に見受けられるものである（松本 1979, p.12）。その構想が、東京都写真美術館設立時にも引き継がれ、今日に至っているようである。

1.5 まとめ

現在、図書室の資料は、来館して閲覧室で館内システムを検索する他に、写真美術館のHP上のOPAC、美術図書館横断検索、そして、新システムが導入されて2年以上が経過し、ナクシスを使用してデータ登録を行ったものについては、NACSIS Webcat (<http://webcat.nii.ac.jp/>（参照2011.1.11））からも所蔵の確認ができるようになっている。

開館15年目にして、書庫の中の資料の出納冊数が最高冊数となったのは、図書室のコレクションが魅力的であること、図書室の存在とその蔵書の魅力を伝える試みを継続して行ってきたこと、インターネットにOPACを公開し、横断検索に参加したこと、最新の図書館システムを導入し、検索と出納の申請がしやすくなったことなど、今まで行ってきた一つ一つの積み重ねの結果、相乗効果によるものであると考えられる。

最新の図書館システムを導入し、それまで外部委託で行っていた作業を自館で行い、図書館同士のネットワークに参加するということは、それまでバラバラであったものを、一つ一つつないで統合していくような作業であったように思う。より多くの種類の仕事をこなさなければならぬという大変さはあるが、本来あったはずの司書の力、使われず眠っていた司書の能力を甦らせることができたのではないかと思っている。

2. 小さな専門図書館から探る図書館の未来の姿

2.1 テクノロジーがもたらしたもの―「小さな専門図書館の可能性」

近年、コンピューター、ネットワークは急速に進歩し、普及し、私たちにあって、より身近で、簡単で便利な存在となった。予算的に非常に厳しい小規模な専門図書館でも、高度な図書館システムを導入することが可能になって来ている。インターネットにつながった端末と、書誌ネットワークに対応した図書館ソフトがあれば、たとえ職員が一人しかいないワンパーソンライブラリであっても、OPACをネット上に公開したり、書誌ネットワークに参加することで、世界のどこかで必要としている誰かに向けて、書誌・所蔵情報を発信できる時代になった。

その一方で、巨大ネットワーク上で公開される書誌・所蔵のデータは、ネット上の数えきれない利用者が繰り返し検索するため、その影響は計り知れない。より正確であること、また、検索してヒットした資料が自分が探している資料であると判断するのに十分な情報が提供されていることが、厳しく要求されることになる。専門図書館では、そのジャンルの希少本を所蔵している場合が多く、共同目録ネットワークの中で一番最初に書誌情報を作成し、登録する機会も珍しくない。そのデータを世界中の図書館がコピーカタログで利用する可能性があり、最初に登録を行う者の責任は重く、また、その分やりがいも大きいものである。以前、ナクシスを検索していて、日本を代表する写真家の一人である植田正治氏の写真集、『童暦』のタイトルの読みが「どうけい」となっていたことがあった。写真美術館で働いていると、日々の業務の中で何らかの形で植田正治について知る機会があり「わらべごよみ」と読むのが正しいことを経験で知っている。主題に対する十分な知識をもった専門図書館のスタッフは、より正確なデータを書誌ネットワークに提供できる可能性を持っているのではないだろうか。

技術の進歩と普及により、以前では、外部に委託していたような業務を、図書室の中で司書がこなせるようになってきている。開館準備期間のように大量に資料を収集し、登録する必要があるときは、データや装備の外部委託という手段は有効な場合もあるだろう。しかし、受入冊数がある程度安定した段階においては、資料を外部に預けることの手間隙、そして、資料とじっくり向き合い書誌を作成するという、資料を知る絶好の機会を現場の司書が失うというデメリットの方が、当館のように少人数でレファレンスも兼務するような小規模図書館では大きいように思う。また、システムに関してもコンピューターそのものがまだ珍しく、操作がユーザーフレンドリーでない時代においては、専門家の手を借りる以外、選択肢はなかったが、最近ではある程度はユーザーが自由にカスタマイズできる機能までもが搭載されており、現場のスタッフがシステムに手を加えられる機会も増えてきてい

る。装備の面ではどうだろう。当館では、実際に展覧会で展示物として展示する機会を想定し、資料のオリジナルの状態をなるべく保つようになっている。保護のための透明なカバーは取り外し可能なものを使用し、ラベル類は直接資料に貼付しないようにしている。以前は外部に依頼していた本のサイズに合ったカバーの作成も、誰でも簡単に美しくカバーがかけられるイタリアの小さな優秀な機械の登場で、現在では図書室の狭いバックオフィスの作業台の上でできるようになった。

以上のことにより、以前よりも、現場で働く司書がより所蔵資料と向き合う時間が増え、より目録規則や書誌ネットワークに精通し、より図書館システムについての知識を増すことが可能になっている。現場の司書のところに様々な知識が集約し、蓄積するようになったように思う。これらの知識は、もちろん、レファレンスによって、また、利用者がより検索しやすいよう登録の仕方を工夫することなどによって、図書館の利用者にやがて還元することができる。当館では、司書は毎日、交代でカウンターに立っている。直接、利用者と触れ合う機会が多いのも小規模の専門図書館ならではの。主題について、所蔵資料について、検索システムについて、ネットワークのどこを探せば必要な情報に行き着くかをよく知っている人物が、カウンターにおいて質問にすぐ答えることができる。スペースが狭く、人員が少ないという必然性からでもあるが、事実上、ワンストップサービスを提供することができる。また、逆に、カウンターに立つことで司書も、利用者によって、日々、鍛えられる。レファレンスを受けることで主題についての知識をより深めることができるのである。

大量生産、大量消費、人口も経済も右肩上がりの時代から、日本の私たちは、今、もっと長期的視野に立った、持続可能な社会へと転換することをあらゆる場面で求められている気がする。図書館もその例外ではない。短期的視野に立つと、売れ筋の人気のベストセラー作家の最新作を何冊も購入するという発想になるのだろう。しかし、長期的視野に立てば、同じ予算でもっと違った本を購入しよう、ということになるのではないだろうか。福原館長が『だから人は本を読む』の中で述べられているように、「図書館は図書館の、本に対するプロの視点というか、矜持があるべきではないだろうか」（福原 2009, p.188）。その意味では、もともと主題が限定されている専門図書館は、長期的視野でコレクションを構築してきた図書館である。一つ一つの規模は小さいが、そういう図書館が所蔵情報を公開し、さらにネットワークでつながると、とても大きな力となることができる。小さな専門図書館がその力を存分に発揮することができる時代が来たのではないだろうか。テクノロジーの力を味方につけた小さな専門図書館は、図書館の未来の姿であるのかもしれない。

2.2 デジタル化がもたらすもの―「場としての図書館の魅力」

社会の大きな変化の中で、地域、家族、学校、職場などの既存のコミュニティが失われたり、コミュニティそのものの質が変化し、その絆の力が弱体化しているように思う。一人暮らしの老人、一人で子育てする母親、失職し一人で職を探す人、今日の日本においては、誰もがコミュニティから孤立する危険性を抱えているのではないだろうか。コレクションとサービスの電子化が進むと、来館せずに図書館のサービスを楽しむことができるようになる。ウェブサイト上の利用者が、実際に図書館を訪れる人の数を上回るのは遠い未来の話ではない。そうになると、もはや、物理的な空間としての図書館は、必要とされなくなるのだろうか。デジタル化は様々な場面で、私たちの生活を便利にした。しかし、デジタル化が進めば進むほど、私たちは、直接人と会い、触れ合う機会を失ってしまうのも確かである。

『デンマークのにぎやかな公共図書館』の中で吉田右子氏は、北欧の図書館の現状を交え、「情報化の進展とともに、年齢・性別が違う多様な文化的背景をもつ人びとが直接集う機会が明らかに減少している」、「しかし、人間が本質的に他者との知的コミュニケーションを求める存在である以上、直接対話のできる物理的な空間がコミュニティには、どうしても必要となってくる。図書館は、そのような要求を満たすためにもっとも適した場所である」（吉田 2010, p.238）と述べている。

図書館は、人とのつながりを取り戻す、年齢、文化、バックグラウンドの違いを越えて、新しいゆるやかな知的コミュニティを作り出すことができる場所なのではないだろうか。それは、私自身が写真美術館図書室で「写真」という共通項で集まって来る、多様な利用者の方々と交流する中で日々、実感していることでもある。超高齢化社会、高度情報化社会、そして、産業構造が大きく変化する時代に生きる私たちは、長い人生の中で様々な複雑な問題に直面し、その問題を解決したり、社会の変化に適応して生きていくことが求められる。図書館は元々「すべての市民の自立について、資料や情報などの知的な面で支援することを本来の役割としているはずである」（片山 2008, p.3）。図書館は、だれもが気軽に利用できる生涯教育の場としても、もっと見直されるべきではないだろうか。

デジタル化が進めば進むほど、司書にはコンピューターではできない、人的支援、また人と人とのリアルな交流の場、新たなコミュニティを生み出す力がより期待されていくのではないだろうか。「デジタル機器を利用したアナログ社会の再構築」（吉田2010, p.238）が未来の図書館に課される課題なのかもしれない。

—最後に—

「キュレーターズ・チョイス」展の際、ライブラリアンズ・チョイスの1冊として選んだものの中にドイツの写真家、Candida Hoferの世界中の図書館を撮影した写真集、『Libraries』があった。この写真集の表紙に使われている、床から天上に至るまで壁面という壁面が本で埋め尽くされたアムステルダム国立美術館のライブラリーの写真を眺めていると、どこか荘厳で、ヨーロッパの大聖堂を思い起こす。司書とは、中世の昔、石工が、石を一つ一つ積み上げ、大聖堂を建築していったように、本を一冊一冊登録し、コレクションという智の大聖堂を作る仕事なのかもしれない。中世の時代、地域の人々は連帯して、巡礼者を惹きつけようと、競ってカテドラルを建設したという（森野2000, p.244）。そして、そのカテドラルは、数百年たった今日もそこにあり、世界中から訪れる人々を魅了し続けている。

準備の段階から、開室15年に至るまでの間に、一体、どれだけたくさんの方々が図書室に関わってくださったことだろう。現在、関わっている者の一人として、これまで図書室を支えてくださったすべての方に感謝を申し上げるとともに、これからも皆様と力を合わせ、後世の人々をも魅了し続けられるような写真美術館図書室にしていければと思う。

謝辞

本稿執筆にあたり、松本徳彦氏より写真美術館準備期間の貴重な資料をご提供いただき、当館専門調査員の金子隆一氏からは当時の貴重なお話をうかがった。末筆ながら感謝申し上げます。

[参考文献]

- 井上真琴『図書館に訊け!』筑摩書房(ちくま新書)、2004年
片山善博「図書館のミッション」『丸善ライブラリーニュース』2008年、復刊第3号、2-3頁
金子隆一、アイヴァン・ヴァルタニアン『日本写真集史』赤々舎、2009年
菅谷明子『未来をつくる図書館:ニューヨークからの報告』岩波書店(岩波新書)、2003年
日本写真美術館設立委員会『日本写真美術館』1号(1979.12)、2号(1980.12)、3号(1994.10)
福原義春『だから人は本を読む』東洋経済新報社、2009年
毎日ムックアミューズ編『おもしろ図書館であそぶ:専門図書館142館完全ガイドブック』毎日新聞社、2003年
水谷長志「ミュージアム・ライブラリの可能性」『図書館雑誌』2004年、Vol.98, No.7、438-441頁
水谷長志「美術図書館横断検索by ALC—その公開と課題」『アート・ドキュメンテーション研究』2005年、No.12、27-34頁
松本徳彦「焦点・「日本写真美術館」の実現にむけて」『日本写真家協会会報』1979年、第52号、12-14頁
森野栄一「第5章 お金の常識を疑う」河邑厚徳、グループ現代『エンデの遺言:根源からお金を問うこと』日本放送出版会、2000年
吉田右子『デンマークのにぎやかな公共図書館:平等・共有・セルフヘルプを実現する場所』新評論、2010年
Candida Hofer, *Libraries*, Thames & Hudson, London, 2005